

住吉物語

むかし中納言にて左衛門のかみかけたる人侍りけり。うへ二人をかけてぞ通ひ給ひける。一人はときめく諸大夫のむすめ、その腹に女君二人いできたまへり。いま一人はふるき宮腹の御女にておはしけるが、いかなるすくせにてゆこの中納言よなよな通ひ給ひけるほどに、やがて人目もつゝますなりて、すみわたり給ひけるが、ひかるほどの女君いでき給ひける。おもひのまゝおぼしければ、おぼしかしづき給ふことかぎりなし。姫君日かすふるまゝに、おひいで給へり。年月かさなりて八つばかりになり給ひける年、母宮れいならず惱み給ひけるが、日を経て重くのみなりまさり給ひければ、中納言に聞え給ひけるやうは、「我はかなくなりなば、このをさなきものゝため、うしろめたうなむ侍るべき。われなからむわとなりとも、なみなみならむふるまひせさせ給ふな。いかにもいかにもみかどに奉らせたまへ。ことむすめたちにおぼしおとすな」となくなくきこえ給へば、中納言もうち泣き給ひて「我もおなじおやなれば、おとりてや」などかたらひつゝ、明しくらすほどに、世のあはれにはかなく常なき所なれば、なさけなく昔がたりになりはてにけり。中納言おなじ道にと悲み給ひながら、後々のわざもさるべきやうにして、四十九日もほどなうはてぬれば、もとの北の方へわたりたまひにけり。姫君をさなき御心ちに、ことの業につけて、こ宮の御事をおぼしつゝ、かなしみ給

ひてけるに、中納言さへわたり給ひぬれば、いとゞつれづれかぎりなく、二葉の小萩露おもげなりければ、御めのととかくなぐさめてぞ過しける。中納言ともすれば見きこえわたりて、かへり給へば直衣の袖をひかへて、ゆくへもしらぬほどなれば涙を流しつゝ、慕ひこほまほしきけしきを、御覽するにつけても、はかなくなりし人のおもかげ、ふと思ひいづるにも胸うち騒ぎ、「おさふる袖もあやしくて、いと心苦しくこそ侍らむこほ」などかたらはせ給ひて、こしらへおき、我にもあらぬ心ちにて歸らせ給ひにけり。かへり給ひても、姫君のおほし歎きつる俣のみ心にかゝりて、ことむすめたち一つ所にすませまほしくおぼしながら、「今も昔もまことならぬ親子の中なれば」とてめのとのもとにすませまほしくおぼしなから、こほまほしに、光さしそふ心ちして見え給ひければ、めのと「あはれこの御けしきを故宮に御覽せば、いかばかりおほしかしづき給はむ」などいひて、御ぐしをかきなで、なくより外のことなかりけり。十あまりにもなり給ひければ、めのと中納言に申しけるは、「幼くおはします程こそとて、もかくても侍れ。このひと、せふたとせになりて、いかにならせたまふる。年月心もとなくなむかなしく。故宮のおほせ候ひし御宮仕いかに」ときこえければ、中納言うれしくも心にかげぬることよ。我も忘るゝときなけれども、思ふにかなはぬ事のみにてこそは過ぎゆき侍れ。さりながら迎へて見聞えむ」とて、む月の十日と定めてかへり給ひぬ。やうやくその日にもなりぬれば、迎へ奉りたまひたれば、今二人の御むすめたちとうち語らひておはしますを見て、いと嬉しきことにぞめやすくおぼしける。中の君三の君は、とりどりにいとに

はひやかに、なべてのにはあらぬ御けしきなれど、姫君は今一しほにはひ加はりて、ひかるなどはこれを申すにやとぞ見え給ひける。この姫君の御めのと子に侍従ときこゆる侍りけり。年は姫君に今二つばかりのまさりにて、すがたありさまありつがはしく、ものなどいひ出したるさまざま、いとあらまほしくぞ見え侍りける。これぞ姫君につきそひて、たがひに片時も立ちはなれむも、物憂く思ひてぞあかしくらし給ひける。中納言西の對しつらひてすませ侍らむとて、そのいとなみにてぞ侍りける。ま、は、こ、ろの中にはいかゞ思ひけむ、人きゝには聞ゆるやう、「誠に母宮におくれ給ひてのち、迎へ奉らまほしう侍りつれども、けふけふとのみ思ひて過ぐしつるに、若き人々あまたおはする、たがひにつれづれなくさめていと嬉しきことにこそ。いかにをさなき心ちに、その昔戀しくおぼし出づらむ。あなわはれや」と聞ゆれば、めのと「まことに年ごろあやしき所にうづもれておはせしに、はていかになど、かきくもり悲しく侍りしに、これを見奉ればよろづはれぬる心ちして、よみぢやすくこそ」などいひつゞけて、うち泣き侍りけり。むかひばらなれば、中の君には兵衛のすけなる人おはせてけり。西のたいに住みたまへば、中の君、三の君むつれ遊び、たがひにむつまじく思ひてあかし暮し給ひけり。故宮の仰せられし御宮仕のこといかにと、御めのとわするゝときなくおどろかし侍りければ、中納言「われも怠るときなけれども、北の方に聞えあはせむに、我が子ならねば心に急がむことも難ければ、いひも出でず」とて思ひわづらひ給ひけり。かくて月日重なりゆく程に、右大臣なる人の御子に、四位の少將とて世に勝れたる人侍りける。

いかにも思ふさまなる人もがなと、朝夕は御心もそらにあくがれてものがなしきに、右大臣のはしたものに、そらざへといふものゝ男にてありける、下づかへになりて筑前と聞ゆるなむ、中納言の宮の世までは、このもの大夫といふものを男にて侍りければ、朝夕にこの姫君をば見聞えけり。筑前、右大臣の家の北の方にて、人のよしわろき事語るついでに、「中納言の宮腹の姫君こそ、をさなおひめでたく二葉の小萩を見る心ちせしか。いかにおひいで給ひたらむ。こ母宮のうせ給ひて後は、四五年は見侍らず」といふを、少將立ち聞きたまひて、いとうれしき事を聞きつるものかなとおぼして、我が曹子に筑前を呼びて「見るらむやうに、さもとある人あまたあれども、物憂くのみしてすぐす。中納言の宮腹の姫君は見しか」と尋ね給ひければ、筑前、「男にて侍りしもの故母宮に侍りしかば、よく見奉り侍りし。世にうつくしくさふらふ。中納言殿は宮仕をとのたまへども、うちかなはでおぼし歎くとぞ承る」といへば、「その人の事いひよりて、文など傳へてむや」とのたまへば、「かなはむことは知らず。御文をもて参りてこそは見侍らめ」と聞ゆれば、よろこびて、十月ばかりにもみぢがさねの薄葉に、

「はつしぐれ今日ふりをむるもみぢ葉の色の深きをおもひしれとぞ」とかきて、ひき結びてやり給へば、その日の暮れかゝるほどに、筑前は中納言のもとにまかりつれば、人々めづらしみあへる中に、侍従「あなゆゝし。いかに思ひいで、参り侍るにか。その昔の心ちして、いとむつまじくあはれにこそ」などいへば、筑前はかなきことのみ繁く候ひて、心ならず今

までまゐらざりし。我が身ながらつらく侍るを、さてのみやはあるべきとてまうしひらかむとて参り侍るなり。いつといひながら、年よりては過ぎこしかたの戀しさのかたくなはしさに、人々をも見奉らむとて」などいひて、姫君もありしむかしのことの葉さへあはれにとぞ聞き居給へる。さても出ぎまに筑前侍従を呼びだして、「右の大いとの、御子に少將殿と申す人の御文なり。かやうの事は口入れまにく、侍りながら、やんごとなき人のいたく仰せらるゝことのいなみがたさに」といへば、「いざや、おぼえずながらたまひあはすることなれば」とて姫君にまかまかの文とて、ひきひろげて御傍におきたれば、御顔うち赤めて、とかくの御事もまきえ給はねば、ことわりと思ひてかくなどいへば、筑前そのつとめて少將殿にまゐりて、ありのまゝに聞ゆれば、「さてもさてもいかにおひいでさせ給ひたる」と問へば、「まことにこの世ならずかたはらひかるほどになむ。琴の音掻きならしておはしまし、に、筑前まゐりて、そのむかしの事ども人々にかたらひ侍りしかば、母宮の御事どもをりをり歎き給ひし御すがた、いへばおろかにこそ。女郎花の露おもげにて、まがきの外にたふれ出でたる心ちして、その事となく哀にいとほしく、よその袂までも所せきほどに」などいへば、いよいよ心そらになりて、「はじめはさのみこそは。またまたも聞えさせよ。この事があへたらば、この世ならず思ひ侍りなむ」とのたまへば、「すすすすきさやうに侍れども、君のかくまでおぼしたらむことをば、いかでおろかに」と聞ゆれば、いとうれしくて、また文書きてたまひければ、とりて侍従にとらすれば、「ならばせ給はねば、いみじくわびしげにおぼしたる

ことのいとほしさに「などいへば、筑前」おのれも卑しきことならば、何しに申さむするに、おぼえすくなき御宮仕よりは、この公達におはしませば、なかなかめやすきことにてこそ。うけたまはるやうにては、その御宮仕の御事もかたくこそ。この少將殿は、今の後の御せうとなれば、唯今世にいで給はむする人なり。御かたちよりはじめて、なにはのことにつけてもひとしき人やおはする。御ためうしろめたきことをばいかでか」といへば、「いざや中納言殿も、内まわりのことより外にのたまはず。なみきみならむさまに、おぼしよらむとはよも」といへば、姫君うれしと聞き居給へり。筑前「一くだりの御かへしにても給はらむ」とせめければ、「かやうのこともならねば」とて思ひ放ちたるさまを見て、かへりつゝ「こまごまとかたり聞ゆれば、少將」さこそあらめ。たゞなほなほも聞えさせよ。いかなるべきにか。この事かなはずば、世にあるべき心ちもせねば」とてうちながめがちにておはするを見るにもいとほしく、日ごとに行きてはのめかせども、ゆく水に敷かく心ちして、いひ頼ひありくほどに、まゝは、この事はのぎゝて、筑前を呼びて、「このほど對の君に文つかはすなるは、いかなる人やらむ」と問へば、暫しはとかくあらがひ侍りけれども、あながちにとひ侍りければ、ありのまゝにまかじかと聞ゆれば、繼母これを聞きてのたまふやう、「さやうの公達は、人にいたはられむとこそおぼすべけれ。母もなき人よりは、三の君のねびまさりたまひたるに、さるべきさまと思ふに、みゝよりにこそたばかり給へかし。さらばそこをこそこの世ならす思ひ侍らめ」と心ふかくいひければ、さすがにいなみがたさに、「まことに度々さきえ侍れど

も、御かへしもたまはねば、少將殿、筑前をのみ責めさせ給ふもわりなく侍る。さりとても後
まで申しえむことも、かたげに見ゆるも心ぐるし。さらばさるこそは」といへば、よろこび
て、白き小袷一かさね、「これは三の君の」とて出し給ひければ、よろこびて、「さらば少將殿
にはもとの御志の人なりと知らせ奉らむ」と申しければ、「よくのたまひたり。そのよしにて
こそは」とてよろこび給ひけり。その後筑前、少將殿にまゐりて、「申しえむことはありがた
く侍れど、今一度御文をたまひて聞えて見む」といへば、いとうれしくて、かくぞありける。

「世とともに烟絶えせぬふじのねのしたのおもひやわが身なるらむ」とかきて、筑前とり
て、「少將殿の御文」とて繼母に奉れば、ゑみまけて、「美しくも書き給へるものかな。この
御返し」と聞ゆれば、三の君たばかられ^えたることをば知り給はず。はぢしらひたるすがたいと
めやすく、いとほしささまなり。硯紙とりいだし、「それそれ」と責められて顔うちあかめ
て、

「富士のねのけふりと聞けばたのまれずうはの空にやたちのぼるらむ」とかきて引き結
びたるを、筑前とりて少將殿のもとにゆきて、「御返し」とてきこゆれば、少將たばかられ^える
も知らず、急ぎあけて見たまへば、手などをさなびれて見えけれども、よろこび給ふこと
かぎりなし。またまたもかよはしけり。たいの御方の人々このよしはの聞きて、いとをかし
く思ひあひたまへり。かくしつゝ、日數も經ずしてかよひ給ひける。少將何心もなくぞ過ぐ
し給ひける。幼きさまもことわりと思ひつゝ、ひるもとまりて見給へば、聞きしほどには

あらねども、なべての人には侍らざりければ、かよひ給ひけり。中納言もたばかられ知るも知らず、少將に逢ひてよろづきこえわはしてぞ侍りける。まは、かしづきたまふことかざりなし。寢殿のひんがしおもてにすませければ、少將すぎさまに西の對を見れば、よしあるさまなれば、いかなる人のすむにや知とゆかしおほしてわかしくらすほどに、少將、秋の夜のつれづれと、長さねざめになしく物あはれなるさま中に、ねやらかき萩の葉にそよめきたる風の音も、夜ごとかよふ心ちして、いとほだ寒き枕の下に、夜もすがらおとなふさざりずの聲も、そのこと、なく鳴くに、涙おさへがたき妻戸なるをりふしも、やさしき箏のことの音そらに聞えければ、あなゆゝし、こはいかにとおもひて、枕をそばだて、聞きたまひければ、西の對に聞きなしたまひけり。日ごろよしありて見るに、いよいよいかなる人にかと、心をしづめて思ひたまふ中に、わがたたらひそめし人こそ琴をばひくと聞きしかと思ひて、「これを聞き給ふにや」ととへば、「はじめよりあはれに聞きつる」とのたまへば、心ありとおもひて、「これはいかなる人の琴の音」と問ひたまへば、「わが姉にて侍る人のひき給ふなり」とのたまひければ、「兵衛のすけどの、か」と問ひ給へば、「さにはあらず。みやばらにておはするなり。常に心をすまして琴を弾きたまふなり」となにぞ、ろもなくかたるもいとほしなから、心のうちにはあさましく、たばかられにけるものかなと思ひつゝ、對の間にいかばかりをこがましくおもふらむ、筑前が口をしさよと思ひて、明けもはてねど、出で、筑前を呼びよせてうらみけるに、いひやるかたなく、かたはらいたくおもひてぞありける。

「今はいふにかひなし。なほ知らぬ顔にて過ぐさむ。あのあたりにもあなかしこあなかしこ聞えさすな」とのたまひければ、筑前顔うちあかめて、「なにしにか」とぞたちける。少將は、三の君をもあはれと思ひながら、思ひそめてしことの未なからむのみにあらず。さしもきこえざりし人だにもかほどこそ侍れ。ましていかならむとゆかしくぞおもひ侍りける。いかでか見奉らむなど思ひわたるほどに、冬にもなりにけり。侍従にいかでかものいはむと思ひて、思ふほどの事ども書き給ひて、直衣の腰にさしはさみて、雪のいみじう降りたる日たゝすみありきて、まとのもとに立ち寄りて聞けば、端近くいざりいで給ひて、「をかしき四方の梢かな。いづれを梅とわきがたくこそ」といひて、うちはらふ中に、今すこし忍びたる聲にて、琴かきならして、「かひのしらねをおもひこそやれ」といひてけり。これなむ姫君よと胸うちさわぎて、まのびかねつゝ、蓐をうち叩けば、あやし、誰ならむと見れば、少將たちたまへり。侍従あさましく思ひて、かへりなむとする装の裾をひかへて、結びたる文をやり給ひて、「よろづ人のつゝまじさに」とてかへり給ひにけり。あやしくいかなる文かと思れば、

「白雪の世にふるかひはなけれどもおもひ消えなむことぞかなしき」とて、さまたまの事書き給へり。姫君にこれをきこゆれば、さすがにあはれに思ひながら、「よそなりしそのかみだにも思ひよらざりし。今はいよいよ人ぎゝ見ぐるし。ゆめゆめ」とぞきこえける。かくしつゝ、新玉の年もかへりにけり。む月十日あまりの頃、中の君、「今や嵯峨野の春の氣色をかしかるらむ。忍びつゝみむなどいざなひければ、おのおの「まことに」などいひて、出で立ち給ひ

けり。さぶらひもうちゆりたりけるをぞ、御供にまゐりける。網代車三輛、一輛には姫君、今一輛には中の君、三の君、一輛にはきぬのつまきよげに出して、若き女房下仕など乗りたりけり。少將はのきよて、嵯峨野へさきに行きて、松原にかくれ居て見れば、この車ども近くやりよせて立ちならべたり。さうしき牛飼などをば遠くのけて、侍二三人ばかり近くよせて、女房はしたもなど、車よりおりて松ひきあそびけり。姫君たち車のすだれあげたれば、たしかならぬどほのかに見ゆ。少將よくかくれて見るをもえらず。女房ども「いとをかしきぬの、けしき御覽せよかし。見苦しくも侍らず。さまさまの草ども萌えいでたり。なつかしく」などきこゆれば、中の君おりたまへり。紅梅の上に濃き綾のうちき着給へり。さしあゆみ給へるさまいとあてやかに、髪はうちききの裾にひとしかりけり。次に三の君おり給へり。花山吹の上に萌黄のうちきなり。ありつがはしきさまは、今少しまざりてぞ見え給へる。姫君はとみにもおり給はぬを、いかにと責めければ、侍従さしよりて、「いかに人をばおろし參らせ」と申しければ、下りたまへり。櫻がさねの御ぞに紅の單袴ふみしだき、さし歩み給へる御すがた、いとらうたくうつくしなどいふもおろかなり。髪はうちききの裾にゆたかにあまり、たけのほど、まみ口つきいとあてやかに、こと人々よりも今一しほにはひくは、りて見え給へば、これを人に見せばやとおどろかれたまふ。おのおの人ありともしらず遊びあへるを、よくよく見給ひて、少將あくがれて、大なる松の下に居給へるを、この姫君しも見つけたまひて、顔うちあかめて、いそぎ車に乗りたまへるにつけても、心あるさまなり。おのおのさわ

きてかくれあへるさまも、あらまほしきほどなり。少將のたまふやう、「嵯峨野のゆかしさに遊びつるほどに、くるまの音のしはべりつれば、あやしや、たれにかとてたち去のびたるほどに、かくれたりし細あれば、あらはれてのりしやうとかや。まゐりあひたるうれしさよ」とて、

「春霞たちへだつれと野邊にいで、まつのみどりをけふ見つるかな」とてうちずんじたまへば、中の君はひめ君に「それ」ときこゆれば、「そなたにこそ」とのたまへば、かたみにいひかはしたまひて、中の君、

「かた岡のまつともしらで春の野にたちいでつらむことぞくやしき」とあれば、少將殿、「君とわれ野邊の小松をよそに見てひきてやけふはたちかへるべき」とて、「この度は姫君に」ときこえ給へども、よしなきありきをして見えつることを悲しくおぼえて、うちそばみておはするを、「いかで」など責めさせ給へば、御返りごとなくとも、むげに知らぬやうにおぼえて、姫君、

「手もふれでけふはよそにて歸りなむひとみの岡のまつをつらさよ」といひけち給ひければ、少將いよいよ忍びがたさに、車のきはにたち寄り給ひて、「なにかくれさせ給ふらむ。かひも侍らじ」ときこゆれば、中の君「車よりは、少將殿の一所こそおりさせ給ひつれ。よの人はいつかはしりたりがほにもたまふものかな」といへば、少將うちわらひ、「ゆかしき御物あらそひかな。いかなるよめにもこそはしるく侍るなれ。御口さよさよ。いかに兵衛の佐

殿に御物あらがひのあるならむ。うしろめたさこそ」など戯ぶれたまひけるも、たゞ姫君にこそと氣色は見え給ひにけれ。少將殿、たびたび歌などよみ給へけり。

「年をへておもひそめてしかたをか、松のみどりはいろふかく見ゆ」とあれば、中の君、「ほどもなき松のみどりのいかなれば思ひそめつ」としをへぬらむ。三の君もおなじくかくあむ。

「千代までと思ひそめける松なればみどりのいろもふかきなりけり」。姫君もつゝましながら、

「子日してはるのかすみに立ちまじり小松がはらに目をくらすかな」。車よりおりたまへて、遊び給ふ御ありさまを見參らせ給ふにつけても、少將、この世にいかにながらへてあるべしともおぼえ給はず、心憂くて人めもまらぬ程にぞ悲みける。さて日暮がたになりけるに、鶯のなきければ、初音めづらしく開きて、三の君、

「わが宿にまだおとづれぬうぐひすのさへづる野邊に長居まつべし」。中の君、

「初聲はめづらしけれとうぐひすのなく野邊なればいざかへりなむ」ときこゆれば、少將かくなむ。

「はつこゑは今日を聞きつるうぐひすの谷の戸いで、幾世へぬらむ」とのたまひて遊びくらしつゝ、かたがたかへり給へば、少將殿、人のおもかげ身にそひたる心ちして、思ひはなれがたく、心のうちも苦しきまゝには、侍従にあひて、「あさましき人にはかられて、かゝる

もの思ふことのわりなさよ。いかにをかしとおぼしけむ。消えも失せまほしけれども、さす
がにすてやらぬものは人の身に「などとてうちなみだぐみ給ひて」「今はいかゞ、たゞ一こと
きこえさすべきことの侍り。これ御覽せさせよ」など度々のたまひければ、侍従「むかしだ
にも聞えわづらひしことなる。今はいよいよかたき仰にこそ」といへば、「わが君一たびの返
りごとをたまひたらば、この世のおもひでにこそと思ふなり」と聞ゆれば、それはいかゞと
思へども、いなみがたくて、度々はのめかしけれども、かなはざりけり。さるまゝに、少將思
ひかねて神佛にいのり給ひける。三の君のもとへもゆかまほしけれども、おもひあまりては
侍従にあひてこそ心を慰むれ。西の對のけしきをたゞ見ずなりなむことの心うくて、常はか
よひければ、よひわかつきに對を過ぎ給ふとは、ふるき歌のいとあはれなるを、をかしき
聲にてうたひつゝ、袖のしぼるばかりにて過ぎありき給ひける。かくしつゝ、あかし暮すほど
に、姫君のめのと例ならず心ちおぼえければ、姫君のゆかしうおはしますに、立ち寄せ給
ふべきよし侍従が許へいひやりければ、忍びつゝおはしたりければ、めのと起さいで、なく
なくさこゆるやう、「さだめなき世と申しながら、思ひぬるものはたのみすくなくなむ。常よ
りもこの度は君も御ゆかしくて、かゝる心のつきぬれば、見奉らむこともこのたびばかりに
やなどおぼゆるに、哀は母宮のおはしまさざりしをこそかなしと思ひつるに、このおいうば
さへなくなりなむ跡のゆゝしさよ。ともかくも走り給はむと見奉りてのちこそと思ひしに、
これを見おき奉りて、死出の山を迷はむことのかなしさよ。はかなくなりなむ後は、侍従を

こそはゆかりとて御覽せさせ侍らむすらめ」などいひて、御ぐしをかきなで、さめざめと泣きければ、姫君も侍従も袖を顔におしあて、「我もともに具し給へ」と聲もまのばす泣き給ひければ、よその袂までも所せく聞えけり。さて侍従をばおきてかへらせ給ふべきよし聞ゆれば、かへり給ひにけり。かくしつゝなやみまさりて、五月のつごもり頃にはかなくなりけり。姫君、侍従がおもひさこそあるらめと、めのとのなげきのうへに、侍従が心苦しき思ひやりたまふ。侍従は母のかなしみの中に、姫君の御つれづれを歎きつゝ、さてのちのちのわざもこそままといとなみけり。はての日、姫君の常に着給ひける鞋一かさね、侍従がもとへつかはずとて、

「からむろも死出の山路を尋ねつゝ、わがはぐゝみし袖をとひなむ」とつまに書きつけてやり給ひければ、侍従これを見て、顔におしあて、人めもつゝまさりけり。とかくいとなみ侍るほどに、七月七日あまりに姫君の許へ参りけるに、初秋の月いとあはれる夜、はし近くいで、世の中のはかなくあはれるとを聞えあはせて泣きぬたるを、少將たち聞きて、あはれさかぎりなかりければ、とぶらひ侍らむとてまを叩けば、侍従は少將なりとて、出であひて聞ゆるやう、「ものおもふは悲しきこと、は、このほどこそ思ひしられ侍れ」といへば、「さこそは侍りけめ。あなわはれ」などいひかよはす程に、さ夜も半に過ぎて、鐘の音さこえければ、侍従何心もなく物がたりの中に、「曉の鐘の音こそさこゆなれ」といへば、「これをいりあひとおもはましかば」とうちながめ給ひけり。姫君もあはれとぞ聞きとがめ給ひけ

る。さて夜も明けにけり。かくしつゝ、過ぎ行くほどに、少將いよいよふかく思ひなりて、「たいもじの御返りごとのゆかしきなり。やすきはどのことを、人のねがひかなへ給へかし」などいひて、

「秋の夜の草葉よりなほあさましく露けかりけるわがたもとかな」など、あさからぬやうに聞えければ、「あまりに人のつれなきもあはれも知らぬに侍る」とて歌のかへしすゝめければ、「あはれと思へども、人めのつゝまじさにこそ」とて、

「あさゆふに風おとづるゝ草葉より露のこぼるゝほどを見せばや」とかきてうちおきたまふを、侍従とりて、

「ゆかりまで袖こそぬるれ武藏野の露けきなかに入りそめしより」とかきそへてやりければ、少將うち見て、うれしさにも胸さわぎて、「一ことばの御返りごとは、世の中の背さがたく、侍従の心のありがたさよ」とて、

「武藏野のゆかりの草の露ばかりわかむらさきのこゝろありせば」などいひ返しける。かくしつゝ、多くの月日かさなるまゝに、いよいよ思ひまゝなりて、世の中をもすさみ宮仕をも忘れて、心のまゝなることならば、消えもうせまはしき程なりければ、

「あまの原のどかにてらす月かけを君もろともに見るよしもがな」となむ。されどもこの度は御返事もなし。何となくながめ給ひて、三の君の御方へおはして見給へば、何心なくおはするを、いとほしくて御物語などして、かやうに世の中のはかなきことを仰せつゞけら

れ、「我いかにもなりたらむ時おぼしめし出しなむや」と少將のたまへば、三の君「時々聞え給ふさへ心うくおぼゆるに、ましてさもあらば、我が身いかにせむ」とのたまふも、さすがにこれもあはれなり「明けぬれば立ちかへらむとしたまへば「いかに」などきこゆれば、少將、「たえなむと思ふものからたまかづらさすがに掛けてくろしとまらなむ」とのたまへば、三の君いとあはれに思ひて、

「絶えはてむことぞかなしき玉かつらくる山びとのたより思へば」とのたまへば、少將さすがに見捨てがたく仰せけれども、明けぬればかへり給ひて、いつしか御文あり。

「白露とともにおきゐてはかなくも秋のよすがらあかしつるかな。かく申したまへどもまた人めもつゝまじさにや、御返りごともなし。暮るればたいの御方におはしまして見給へば、おろしこめて人もなし。三の君の方へおはしましたれども、物憂くてたちかへりなむとまたまへば、心うくおぼえて、

「たまさかにみちくる潮の程もなくたちかへりなむことをしぞおもふ」としたにはほめかしたまふも捨てがたくて、少將のたまふやう、「何となく世の中の心うくのみ侍れば、深き山にと思ひたつに、その時おぼしいでなむや」とのたまへば、三の君「いかに、何故にさることは侍るべき。たまさかに待ちつけ侍るだにも心うくこそ。ましていかにあはれにか」とてうち泣き給へば、あはれにて、「まことやあらまじことぞ」とてとかくあかして、出でさすに對にやすらひて、

「君があたり今ぞすぎ行くいで、見よこひする人のなれるすがたを」とをかしき聲して
うたひければ、侍従聞きとがめて、窓をおしあけて「いかに」といへば、少將「世の中のうさま
さりゆけば、深き山にもなど思ひとりて」などいひ給へば、侍従「いでや一念隨喜とこそうけ
たまはれ。まして武藏野の草のゆかりなれば、おなじ運にこそ」といへば、うれしき善智識と
かやにこそ」と戯ぶるゝも忘れがたくて、「かくこそ笑ひ給ふとも、哀とおぼしあはすること
もありなむものを」といひつゝ、明し暮すほどに、九月にもなりぬれば、中納言北の方にのた
まふやう、「行く末は知らず、二人の君はありつきぬ。この對の方を今年の五節にまゐらせば
やと思ふに、うちあはぬとの心うさよ」とて歎きたまへば、わが子どもに思ひましたまへる
を、ねたしとおもひながらいふやう、「なかなかおぼえすくなき宮仕よりも、ときめかむ上達
部などにあはせ給へかし」などいへば、「なみなみの人には見せむこともあたらしさに」など
のたまへば、繼母「ともかくもはからひにてこそ」といひながら、いかにしてかあやしき名を
立て、思ひうとませむと案じけり。中納言霜月の事なれば、いでたちをのみいとなまれば、
ば、繼母ともいとなむけしきにて、またには人わらはれになすよしもがなとおもひ、人ま
づかなる時に中納言に問ゆるやう、「聞きながら申さうらむはうしろめたきことなれば申す
なり。この對の御方をば、我がむすめたちにもすぐれておはせよかしとこそ思ひ侍るに、こ
の八月よりのことを露知らざりけるよ」とてそらなきをしければ、中納言あされて、「こは何
事ぞ」と問ひたまへば、「六角堂の別當法師とかやいふ、あさましき法師の姫君のもとへ通ひ

けるが、この曉もねすぐしたりけるにや、對の格子をはなちて人の見るともなく出でにけること心の心うさよ」とて「これいつはりならば、佛神などげにげに」といひければ、中納言「よもさることはあらじ。女房などの中にぞさる事はあるらむ」とのたまひければ、「中の格子を放ちていでける。うはの空なることをばいかでか。よくよくきゝてこそ」などいひ給へども、なほげにと思ひ給はざりけり。繼母、三の君のめのとに、極めて心むくつけかりける女房に聞えあはするやう、「この對の君を、我がむすめたちに思ひまじ給へるがねたさに、とかくいへどもかなはぬ。いかゝすへき」といへば、むくつけ女、「我もやすからずは侍れども、思ひながらうち過ぐしさふらひつるに、うれしく」とてさゝめきあはせて、その後三日ありてあやしき法師をかたらし、中納言に聞ゆるやうは「僞とぞおぼしたりしに、唯今かの法師いづるなり」と聞ゆれば、見給ひけるときにいでにける。「あなゆゝ、しのとや。をさなくては母に後れて、まためのとさへにはなれて、あはれ果報わるきものとは思へどもあさまし」とて入り給ひぬ。さて宮仕のことはおぼしとまりぬ。中納言對におはしければ、姫君何心なく居給ふにむかひて、「いみじきことのみ出でくることのあさましさよ」とのたまへば、姫君も何事にやと思ひたまへり。中納言立さまに侍従を呼びてのたまふ、「あさましさ事を聞けば内まゐりはとまりぬ」とばかりのたまひてかへり給へば、心得ぬことなれば、いひやる方なくて止みにけり。さるにてもいかなるにかとて、式部といふ女の對の方に心よせなるにあひて、「中納言殿のまかじかと仰せられしは何事にや、聞きたまふか」といへば、式部まかじかたばかる

よしをいひけり。侍従さわぎて、姫君にきこえあはせて、「母なからむものは世にながらふまじき事にこそ」とて二人ながらひきかつぎて、うつぶしながら、「この事誰にも聞えさすなとていはむほどに、あなたこなたの名のたゞむことも見苦し」とぞのたまふ。まゝははははえたる心ちして、むくつけ女も二人またゑみにゑみあへり。中納言内まゐりこそとゞまり侍らめ、さもあらむ人に見せばやとおぼす程に、内大臣の御子に宰相にて侍りける人、左兵衛のかみにて廿五六ばかりなるが、よろづ人にすべれたるに、このよしはのめかしければ、中納言いとよきことよとて、霜月とさだめてけり。おそろしき心とも知り給はず、まゝはははにいひあはせ給へば、「よき事にこそ」といひて、下にはいと胸いたきことに思へり。中納言對に立ち寄りて侍従にむかひて、「内まゐりのとゞまりしは口をしながら、さてのみやはとてたゞむ月に左兵衛のかみにとおもふなり。そのよし心えておはすべし」とて母宮の三條堀川なる所をまつらひて、そこにすませ奉らむといとなまれけり。姫君、「おやながらおぼすらむことのはづかしさよ。たゞ厄になりて聞えざらむ所にと思ふ」とのたまへば、「中納言殿のかくまでおぼしたらむ、そむき給はむはいとはいなきことにて侍るべし。北の方にこそはいなくおはしますとも、ありへむまゝに聞きひらき給ひてむ」などと侍従いひ慰めける。まゝははははこの事をそねみて、むくつけ女にさゝめきあはせて、「この姫君を、さしもなからむずるげすにぬすませばや」といへば、むくつけ女うち笑みて、「うばが兄のかすへのすけとて、七十ばかりなる翁の目うちたゞれたるが、このほど年頃のめにはなれて、人をかたらはむとす

るに、聞き入るものもなきに、おもひわづらひ侍るに、このよしを申さばや」とさきゆれば、「いひあはするかひありて、いとうれしくこそ、とくとく」といそぎてとのたまへば、かしこに行きてまかじかと問ゆれば、主計助しわぐみにくさげなる顔して、ほゝゑみて、「あなうれし、よきことかな。中納言殿や心えずおぼしめさむすらむ」といへば、「それは北の方のよくよくはからひて」などいへば、「それはよきこと、あなめでたし。とくとくいそがばや」といふ。よくよくかためて歸りにけり。まゝは、にまかじかと問ゆれば、ゑみたまうて、「たゞ神無月二十日頃」など聞ゆれば、「十日よりささ」とさゝめくを、心よせの式部聞きてうちまわぎて、侍従に「まかじかとたばかり給ふなり。おそれは侍れども、ゆゝしく罪ふかきことに侍れば、あはれさに」などゆきければ、「今までながらへておはします心うさよ」とて「さきのたひ尼になりなましかば、そこにとりめおきて、かゝることをも聞かする」とあれば、侍従「かくまでの事とこそおもひ侍らぬ。このたびはことわりにてありける」とねをのみ泣きたまひけり。さて「かくてのみおはしますべきにあらず。中納言殿に申せ給へかし」とさきゆれば、「北の方になき事をいひつけ奉るにや。これをはれたりとも、またもまたもまさりさまの事をおるべし。又いかなる事も猶たばかり給はむすらむ。たゞさこえざらむ野山の中にて尼になりて、この世を思ひ離れむ」と問ゆれば、「この度はことわりにて侍る。さらば、侍従も尼になりて、母の後世をもとぶらひ侍らむ。いかにその時あはれに侍らむ」とて二人ながら袖もまぼるばかりにて、かくはいひながら若き人々なれば、いづくにていかにすべしとも覺え

ざりければ、姫君「めのとだわにらばとかくも計らひてまし。今はそこをこそ何とも頼みたれ。此の月も過ぎなむとす。いかにも計らふべし」とのたまへば、侍従も「いかにも覺えず」などいひつゝとかく案ずるほどに、故母宮のめものとなる女の、宮に後れまゐらせて後に尼になりて、住吉になむ侍りけるを思ひいで、「覺えさせおはしますにや。志かじか」と聞ゆれば、「さるものありと覺え侍るなり。いかでか告げやるべき」とあれば、侍従が母のもとにありける女のよく知りたるを呼びて、やりける文に、

「さても久しきなどはおろかなるにこそ。姫君のおひ出でさせ給ひしとき、母宮もはかなくならせ給ひながらも、いとおとなしくならせ給ひて、その後また侍従が母なりし人も隠れにしかば、誰もたれも知る人もなくて、そのかたのこひしさに、あなゆかし、さこそ世を背きたまはめ。うらめしくもかき絶え給ふものかな。忘草のしるべとかや、さてもさても人づてならで、申しあはすべき事なむ侍る。よろづを棄て、夜を晝にまゐりたまへ。あなかしこあなかしこ。なべてなるらむ事には」

などがきてやりける。住吉に行きて然々と聞ゆ。尼君急ぎあけてなくなく見て御返り事に、「まことに世をそむきて、住吉のあたりた侍りながらも、朝夕そのむかしの人の御事のみに心にかゝりて、あかしくらす中に、二葉に見えさせ給ひしをよりすて奉りしかば、いかにいかに生ひいでさせ給ふらむとゆかし、行ひの妨とならせおはしませば、忘草も各のみして、片時も忘れ奉るとはなけれども、はかなき世の中のくせにてよな、いまいま

と思ひて過ぐしつる程に、若き御心ちどもにおぼし出で、かやうに仰せられたることの御嬉しさよ。さてもさても仰のまゝに、急に御みづから。あなかしこあなかしこ。

とかきて參らせたりければ、姫君、侍従少し晴るゝ心ちして、人しれず出でたゝむとを侍従にいひ合せ給ふうちに、中納言殿のゆゝしきとを聞き給ひながら、思ひすてす哀に思したるを離れ奉りなば、いかにおぼし歎かむと思ひつゞけて、二人ながらうつぶしがちにて侍るに中納言のみ給へばさりげなくつくろひおはしけれども、姿も殊の外に哀へたるに、涙のもしり出でければ、「三條へわたり給はむとも近くなりたるに、いかにうつぶしがちにて衰へ給ふ」とてまゝは、に聞えあはせ給へば、「何事をおぼすにか。いかなる人を戀ひ給ふにや」とつぶやくを、心得たまはで、様々のもてあそびなど奉り、侍従がもとへ遣はしければ、「かばかりおぼしたる親をふりすてゝいなば、おぼし歎かむとの罪ふかき」とてまた泣き給へり。中の君、三の君わたりて「いかに常にうつぶしがちには」など聞ゆれば、「この程はいかなるべきにか。世の中もあぢきなくて消えも失せまほしき程になむ。もしさもあらむにはおぼし出でなむや」と袖も所せくのたまへば、「あなまがまがしき。何しにかさる事はあるべき。侍従の君いかに戀しく思はせむ」といへば、侍従「いかならむ世までも、誰か忍びさふらはむ。思ひ侍るに、御たはぶれあがらもあはれに忘れがたく」とて思へるとの涙をとめて、侍従、「命あらばめぐりやあふと津の國のあはれいくたのもりにすまばや」と口ずさみて、人めあやしき程にぞありける。中の君物のあはれを知り給へば、その事となく涙をのぞひ給ひけ

り。姫君、「つゆの身のはかなきは、かやうなる程にいか」など聞ゆれば、中の君、

「契りてぞおなじ草葉にやどるらむともにぞきえむよはのちらつゆ」といひたまへば、姫君も侍従もいと涙もよほされて、別れむことを悲しと思ひけり。中の君、三の君何となく世のはかなさをあはれとおもひ、常は心をすましておはする人なればと、大かたの事を思ひて、おのおのかへり給ひけり。心よせの式部、ひまもあれば立ちより「たばかり給ふこと近くこそ。いかにせさせ給ふべきにか。いとあはれにこそ」と聞ゆれば、「かやうにおぼしたることの忍ばしさに、いかならむ世までもとこそ思ひ侍れど、あはれは誠にかくて候へども、御かたをこそたのみ奉りつるに、いかにならせ給ひなむするにか」とてうちなきけり。さるほどに住吉の尼君のぼりて、かくと告げれば、暮るゝほどに忍びたる車奉りければ、いひかへして、そのほどに見苦しきものどもとりしたゝめてけり。心の中いかにあはれなりけむ。その時しも中納言わたりければ、さりげなくておはしけれども、このたびばかりこそ見奉り侍らむずらめと思ひければ、忍びがたき色もあらはれて、顔にふりかけたる髪のひまより涙もり出づるを見給ひて、「いかに母宮の事をおぼすにや、めものとも事をゆかしとおぼし出づるにや、また兵衛のことを心づきなくおぼすにや、ともかくも何事にてもおぼさむやうに聞え給ふべきにこそ。親の思ふばかり子は思はぬことの心うさよ。いかにばかりにかあはれと思ひ侍る。頭の髪を筋ごとにとあちちとも、いなぶべき身かは」とのたまへば、「母宮のことばも、まためのとこの事も思ひ侍らず。殿をも見奉りて程經ることかやと、かなしく」などことば

の聞えぬ程に、なくなくさこえ給へば、中納言うちなき給ひて、「三條におはしますとも、まろが生きたらむほどは離れ聞ゆべきにあらず。何かはその事をおぼす」とて立ち給ふを、今一たびと顔ふりあげて見たまふに、目もくれ心もさゆる程にぞありはる。侍従とともにぞ泣き居給へる。さ夜ふくる程に車の出できたれば、櫛の箱と御琴ばかりぞもち給へる。御車のまには侍従乗りたり。頃はながつき二十日あまりのことなれば、有明の月かげもあはれなるに、出で行きたまひけむ心のうち、いかばかりかなしかりけむ。嵐はげしき空にかす絶えぬねを鳴きわたる雁も、をりまりがほに聞ゆ。雲間をいづる月の、常よりも我をとぶらふ心ちぞしける。さて尼君のもとへ行きて、かきくどさこまごまとかたりければ、「誠におぼしたつも御ことわりにこそ。今も昔もまことならぬ親子のありさまのゆゑしよ。繼母ながらもいづくをにくしとか見給ふらむ。あさまし。かゝるうき世なれば、思ひすて侍るものを」とて墨染の袖をまぼるばかりにぞありける。夜の中に淀に着きてけり。少將その夜對に行きて、兵衛のすけといふ女して、侍従を尋ねさすれば、音もせず。姫君の御跡にふしたるかど、几帳を見るに姫君もおはせざりけり。うちさわぎて人々にたづねさせけれども、見えさせ給はざりければ、怪しと思ひけり。さて「中の君、三の君の許におはするにや」といへば、「心軽くたち出で給ふべき人にもあらず。いかなるべき」とて尋ねあへり。夜も明けぬれば、常におはせし所を見れば、傍なる夜ふすまもなく、とりしたゝめたるけしきなれば、誠にかなしく、おのおのまのびねに泣きけり。中納言にまかじかと聞ゆれば、あされさわぎて、聲をさへげ

て泣き悲み給ふことたとへむかたなし。中の君、三の君、「あやしうこのほど心うきものに思ひたまへりしかば、かくまでと思はざりしものを」とおのおのかなしみ給ひけり。繼母あきれたるさまして、「侍従がさにとたづね奉れ」とて中納言殿の傍に、泣くよしにてにがみ居たり。少將はかゝりければ、なさけある御かへしをば、乞給ひてけると思ひつゞけて、對のすのこにさめざめとなき居給へり。三の君こゝかしこ見ありき給ふほどに、も屋のみずに結びたるうすえふありけり。何となくとりて見れば、姫君の手にて、

「なき名のみたつたの山のうすもみぢ散りなむのちを誰かまのばむ」とばかり書き給ひたりけり。これを見給ひて、いよいよあはれまざりて、中納言に見せきこゆれば、「いかなる事のわりければにや」と、我にはいひ給ふべきにこそ。親の思ふばかり子はおもはぬとの心うき」とてこれを顔におしあて、うつつぶし給ひけり。まゝは、「を」とこなどのもとにおはしたる原はこそ。よもかくればはて給はじ。いたくな嘆き給うそ。われもおとらずこそ」といひければ、中納言「おほくの事どもよりも、この君ばかり誰かはある。我が身にもかへまほしけれども、心にかなはぬ世なれば」とうちくとき給へば、繼母、「侍従にくるはかされて、よものふるまひどもし給ふも知らで」とつぶやき居たれば、「あなむつかし。こは何事ぞ」となげきたまひける。さるほどなれば尼君などつれて河尻をすゞれば、をかしうも行きちがふ船に乗るたるものどもの、あやしき聲々して、「つまもさだめぬ岸のひめ松」とうたひて漕ぎ行くも、ならはぬ心ちしておはれなり。京のかたは霧ふたがりて、そこはかとも見えず。比叡の山は

かり波のかに見えたるけしき、ものおもはざらむ空だにあはれなるべし。いはむやありがたきおやにひきわかれ、情ありしはらからをふりすて、いづちと行くらむと思ひつゞけむ心のうち、いかばかりなりけむ。これを見て尼君、

「すみよしのあまとなりては過ぎしかどかばかり袖をぬらしやはせし」などいひつゝ、住吉に行きたれば、すみの江とて所すみあらしたるに、海さし入りたるにつくりかけたれば、すのこの下に魚などあそぶも見えて、南は一むらの里はのかに見えて、とまやどもにみるめかりほし、蘆の屋に心ほそくけむりたちのぼるけしき、薄墨にかけあしでに似たり。東にはまがきに傳ふ朝顔などかゝりて、岸にはいろのろの花もみぢうゑならべたり。西には海はるばると見えわたりにて、なみたてる松の木の間より、帆かけたる船ども、淡路島をゆきかふさまも、なみにたゞよふかゝり船はかなく見えて、日の入るは海の中に入るかとあやしまれる。わざとならでは人などくべくもなし。しづかにあはれなるすみかにてを侍りける。ちひさやかにつくりて阿彌陀の三尊うつしあらべて、月日の出づるばかりは、尼君西にむかひて「なむさい方ごくらく教主阿彌陀によらい後世たすけたまへ」と申したるを見るにつけても、あらぬ世に生れたるこゝちして、姫君も侍従も「とく尼になりて、おなじさまに」とのたまへば、尼君「御ぐしはとてもかくても侍りなむ。御心にぞよるべき。今はこのおいうばが申さむまゝにおはしまさずば、うちすてたてまつりてかくれ侍るべし」といへば、これも背きがたくて、あけてくれは佛の御前にて經をよみ、花をたてまつりなどをま給ひける。中納言は

思ひあまりて「今一たびこの世にてあひ見せたまへ」とぞいのりたまひける。中の君、三の君なども、姫君のことに入れてあはれに、侍従がよろづをかしかりしものを、あはれいかなる所に住みてみやこのことをおぼしいづらむと、忘るゝ時なく忍びつゝ泣きたまふ。まゝは、「何事ぞ、いつとなくいまいましと泣きたまふは。我がいかにもなりたらむには、よもかくはおぼさじものを」とはらちちければ、おやながらもなまけなく、うたてにぞおぼしける。さて住吉には、やうやう冬ごもれるまゝに、いとさびしさまざりて、あらき風吹けば、わが身の上になみ立ちかゝるこゝちしてける。沖より漕ぎくる舟にはあやしき聲にて、にくさびかけるなどうたふも、さすがにをかしかりけり。すみの江には霜がれのあし水にむすぼれたる中に、水鳥のつがひうはげの霜うちはらふにつけても、思ひ残すことなかりけり。「中納言殿よりはじめて、かたへの人々いかにおぼしなげくらむ。親にもおもはせ奉るは罪深きことにこそ。生きてありとばかり知らせ奉らむ」とて尼君のもとにこわらはの京より具したりしに、「まかじかの所にもちて参りて、いづくよりといはで、このふみ奉りて、さてにげかへれぬ」と、よくよく教へてけり。さて文をとらすれば、「いづくより」とてはしたものの出で、とりぬ。名を問へばまうさず。出で、見ればつかひなし。いかなる事にかとて文を見れば、ひめ君の御手にて、

「あなゆゝし、世の忍びがたさよ。ゆくへも知らぬほどになりしことを、おぼし歎く人もおはすらむ。あさましなから旅だちつる心、たゞおぼしめしやらせたまへ。慰むかた

とては、そなたの風のむつましくて、あかしくらすになむ。たれもたれもおはしますにや。おはれむかしを今にあす世なりせばなど。さてもさてもとのいかにおぼしなげかせ給ふらむ。ことに罪ふかくこそ。はかなき命ながらへたりとばかりきこえ奉るになむ」とかきすさびて、おくに、

「あさがほのかげろふの
うちなびき
ありそ海の
わがごとく
ねぬなほの
あさましく
おもほえず
うもれ木と
たちわかれ
かへしつゝ
みちのくの
さゝがにの

はなのうへなる
あるかなきかの
むれ居るたづを
かひなきうらに
ほしやわづらふ
くるひともなき
ながれ出でにし
いかにちぎりし
身はなりはつる
ゆくへもまらず
ぬる夜のゆめの
あぶくまがはを
くもでにものを

つゆよりも
こゝちして
わかれつゝ
しほたるゝ
日を経つゝ
あしびきの
ふるさとに
いにしへの
つるの子の
まらなみの
ゆめならで
わたるべき
おもふかな

はかなきものは
世をあきかせの
たいひとりのみ
あまの羽ごろも
なげきますこの
やましたみづの
かへらむとだに
わが身なりをも
くもぬはるかに
よるのころもを
こひしきひとを
わが身ならねば
とりのこゑだに

おともせぬ

とはちのやまの

たにふかみ

ひとにえられぬ

としをへて

くちははつとも

なりはてぬべき。

濱千鳥あとはかりだに知らせねばなほたづね見むまほのひるまを」となむありける。これを見て、たゞあはれさおしはかるべし。中納言に見せ聞ゆれば、聲もをしまず泣き悲み給ふことかぎりなし。「この使を失ひつらむことの口をしさよ」とて、これを顔におしあて、うちふして、なかなかひたすらに思ひつるよりは悲しくて、いかなる所にならぬ心に旅立ちてあかしくらすらむと、かなしさまさりて、やがてさまかへむとし給ひけるを、まながへる人々、「今一度もとの御姿にて姫君に逢ひ奉らむことを、たがためにもほいなるべき御事」とぞとゞめ申しける。少將この事のおぼつかなさに、うへのもとにおはしたれば、三の君まかじかと袖もまぼるばかりにかたり給へば、ものゝあはれを知りて、かくのたまふよとおぼしけり。かくて正月のつかさめしに、右大臣は關白になりたまふ。少將は中將になりて三位したまへり。中將はそれとも思はで、偏に神佛の御前に参りても、「姫君のありどころえらせ給へ」とぞ祈り給ひけれども、させるゑるしもなかりけり。□もすぎて九月ばかりに初瀬にこもりて、七日といふ夜もすがらおこなひて、曉がたにすこしまどろみたる夢に、やんどとなき女をばひきて居たり。ひきむけて見れば、我が思ふ人なり。うれしさせむ方なくて、「いづくにおはしますにか、かくいみじき目をば見せ給ふぞ。いかばかりか思ひ歎くと知り給へる」といへば、うち泣きて、「かくまでとは思はざりしを、ひとあはれにぞ」といひて、

「今はかへりなむ」といへば、袖をひかへて、

「わたつ海のこととも知らずわびぬれば住吉とこそあまはいひけれ」といひて立つを、ひかへてかへさずと見て、うちおどろきて、夢としりせばと悲しかりけり。さて佛の御えるしごとて、夜の中にいで、住吉といふ所尋ね見むとて、御供なるものには、「精進のついでに、天王寺住吉などに参らむとおもふなり。おのおのかへりてこのよしを申せ」と仰せられければ、「いかに御供の人なくては侍るべき。すてまゐらせて参りたらむに、よき事さぶらひなむや。」慕ひあひけれども、「まげんをかうぶりたれば、そのまゝになむ。ことさらに思ふやうあり。いはびまゝにてあるべし。いかにもぐすまじきぞ」とて、御隨身一人ばかりを具して、じやうえのなべらかなるに、うす色の衣に白きひとへ着て、藁履はゞきして、たつた山ゆきかくれ給ひにければ、きこえ煩ひて御供のものはかへりにけり。住吉には、その曉ひめ君の、御あとにふしたる侍従に聞ゆるやう、「まどろみたりつる夢に少將のたまふやう、心ばそかりつる山の中に、たゞひとり草枕しておき臥したまふ所に行きつれば、我を見つけて、袖をひかへて、

たづねかぬふかき山路にまよふかな君がすみかをそこと知らせよとなむありつる」とあはれに語り給へば、侍従「げにいかばかり歎き給ふらむ。まことの御夢にこそはべれ。あはれとおぼさずや」と聞ゆれば、「岩木ならねばいかでか」などいひつゝ、あはれげにおぼしたりけり。中將はならぬさまなれば、藁履にあたりて足より血あえり。ゆきやらぬけしきな

れば、道行き人あやしきものども、目をつけてぞ見あひける。さてもなく西の時ばかりに、はるばるとなみたてる松の一むらに、蘆屋とどころにあり。海見えたる所に行き給ひぬれどもいづくとも知らず。思ひわづらひて、松の下にやすみ給ひけるに、十あまりなる童、松の落葉ひろひけるを呼び給ひて、「おのれはいづくに住むぞ。このわたりをばいづくといふぞ」と問へば、「住吉となむ申す。やがてこれに侍るなり」といへば、「いと嬉しきこと」と聞きて、「このわたりにさるべき人や住む」と仰せられければ、「神主の大夫殿こそ」といへば、「さても京などの人のすむ所やある」と仰せらるれば、「すみの江殿と申すところこそそ京の尼上とおはする」といひければ、こまかに尋ね問ひて行き給ひたれば、江につくりかけたる家の、もの寂しき夕月夜、木の間よりはのかにさし入りて、をさをさしき人も見えす、いともの哀なる。日も暮れければ、松のもとにて人ならば問ふべきものをなどうちながめて、たゝすみわづらひ給ひける。さらぬだにも旅の空は悲しきに、夕なみ千鳥あはれになきわたり、岸の松風もさびしき空にたぐひて、琴の音はのかに聞えけり。この聲りつにいらべて、ばんじきてうにすみわたり、これを聞き給ひけむころ、いへばおろかなり。あなゆゝし、人のしわざにはよもなど思ひながら、その音にさそはれて、何となく立ちよりて聞き給へば、釣殿の西おもてに若きひとふたりがほどきこえてけり。琴かきならす人あり。冬はをさをさしくも侍りき。このころは松風浪の音もなつかしく、都にてかゝる所も見ざりしものを、あはれあはれ心ありし人々に見せまほしきよ」とうちかたらひて、「秋の夕は常よりも

旅の空こそあはれなれ」などうちながむるを、侍従にさゝなして、あなわさましと胸うちさわぎて、聞きなしにやとて心をとゞめ聞き給へば、

「たづぬべき人もなきさの住の江に誰まつ風の絶えず吹くらむ」とうちながむるを聞けば姫君なり。あなゆゝし。佛の御あるしはあらたに申すぞと嬉しくて、すのこに立ち寄りてうちたゝけば、「いかなる人にや」とて、侍従や垣よりのぞけば、簀子によりかゝりたる姿、夜めにもしるく見えければ、「あなわさまし。少將殿のおはします。いかゞ申すべき」といへば、姫君、「あはれにもおぼしたるにこそ。さりながら人ぎゝ見苦しかりなむ。われはなしと聞えよ」とあれば、侍従いであひて、「いかにあやしき所までおはしたるぞ。あなゆゝし。その後姫君をうしなひ奉りて、慰めがたさに、かくまで惑ひありき侍るになむ。見奉るにいよいよいしへのこひし」などいひすさびて、あはれなるまゝに、涙のかきくれてものも覺えぬに、中将もいと催す心ちぞしたまふ。「侍従の君の事をば忍びこしものを、うちめしくものたまふものかなと御聲まで聞えつるものを」とて淨衣の御袖を顔におしあて給ひて、「嬉しさもつらさもなばにこそ」とのたまへば、「侍従ことわりにおぼえて、さるにて尼君にいひあはすれば、「ありがたき事にこそ。誰もたれものゝあはれを知り給へかし。まづこれへ入らせ給ふべきよし聞え奉れ」といへば、侍従なれなれしくなめげにはべれども、そのゆかりなる聲に、「たびはさのみこそさふらへ。立ち入らせたまへ」とて袖をひかへて入れけり。紙屏風にやまと畫かきたるひとよるひ立て、母屋のみすに朽木形の經かたびらかけて、いとある

べかしくまつらひたり。いと美しくしきわしに土つきて、所々血うちあえて、顔ささわかみて、苦しげなる御姿を見て、尼君いそぎ出で、聞ゆるやう、「姫君もこれにおはしますになむ。侍従あはれとは見奉りながら、若きものにてうちはなちに申しけるにこそ。尼は嬉しきにもつらさにもならひて、過ぎたる身にて侍れば、忝くあはれに見奉る。あなゆゝし。いかでかおろかには」とて姫君にこのよしを聞ゆれば、「我もおろかならずながら、都の聞えつゝ、まじさにこそ」とのたまへば、「それもことわりながら、よろづ事のやうにこそよれ。人よしあし知らぬものゝ心なき岩木なれども、これ程の事にはゆるぎ侍るものを、今はこの尼を重くおぼしめさば、申さむまゝにおはしませ。さなくば海河にも入りなむ」といひこしらへて、侍従に「たゞ姫君のおはします所へ具し参らせよ」といへば、侍従、中將にこのよし聞ゆれば、「ともかくも」とてうれしげにぞおぼしける。夜更くるほどに、侍従さきにたちてゐるべしつ。さてもうちふす事もおはしませずして、初よりの事どもかきくどきつゝ、なくなくのたまひけり。夜もあけ日も出づる程に、姫君を見奉り給ひければ、嵯峨野にて見しよりも盛りと見え、ぬくれた髪のおぼめきて、なつかしさいふもおろかなり。かくしつゝ、二日三日にもなりしかば、そのわたりにもつかうまつりし人あまたありければ、おのづから聞きつけてぞおのおの参りあへり。さびしき所ともなく、松のもとにて酒のみのゝしりあひひれば、そのあたりのものども驚くほどなりけり。かゝるほどに京には中將殿の、たゞ一人住吉へ参り給ひぬと聞きて、關白殿、かへりたるものをば隨身所へくだされにけり。さてゆかりある人々、左

衛門の佐、藏人の少將、兵衛の佐殿よりはじめて、四位五位などその數住の江に尋ね行き給ひて、「いみじくおぼつかながらせ給ふに、いかに」などいへば、「まげんによりてこれに侍りつる程におはすに、このあたりにあるものに見つけて」などのたまへば、「神佛へ参りては行ひをこそすれ。ゆゑしき御つとめかな」とてたはぶれてうち笑ひ給ひて、「嬉しくこれまでたづね給へり。難波あたりもかゝる序なくば、いかでか御覽すべき」とのたまひつゝ、夜更くる程に、住の江に月さやかに澄みわたりて、松風浪の音にたぐひつゝ、淡路島まで通ひて聞ゆるさま、この世ならずおもしろかりければ、人々住の江にて遊びたはぶれ給へり。三位の中將琴、藏人の少將笛、兵衛の佐笙の笛、左衛門の佐歌うたひ給ひけり。姫君、侍従、尼君などこれ聞きてはるゝ心ちぞまたまひける。さて夜明ければ、海人もめしてかづきさせさせて見給へり。さてその日京へのぼらせ給ふとて、いとことごとしかりけり。姫君をば田舎人のむすめとて、相具し奉りたまふ。姫君をば尼君心やすく見奉りながら、この程のなごりまうすばかりなし。尼君にはいづみなる所あづけられけれど、「行く末の事はおもはず。たゞあの姫君の御事のみぞ思ひ侍りつるほどに、今はよみちやすく」とておくりて嬉しきものから、離れ行くもさすがにわはれなり。「とにもかくにもおつる涙かな。佛になりなむ後ぞやとゞまるべき」とてくどきける。姫君も何となく二とせまで住みし所、離れ行くこそわはれなれ。尼君も「いかにならひて、戀しくかたはらさびしく思はむ」など、侍従に聞えわはせて見かへり給ひければ、やうやう遠くなり行くほどに、一むらの絶間より松の梢遙に見えければ、

「すみよしの松の梢のいかならむとほざかるまで袖のつゆけき」とおもひつゞけられける。かくしつゝ、河尻を過ぐれば、おそびものどもあまた舟につきて、「心からうきたる舟に乗りそめて一ひも波にぬれぬ日ぞなき」などうたひて、淀までぞつきにける。さても京へのぼりつきて、殿に参り給へば、あやしきありきむつかりながら、北の方をしつらひてすませ給ひける。繼母これを聞きて、「中將殿はあやしき田舎人のむすめをこそすみ給ひけれ。あたら人の」などむくつけ女にいひあはせてそねみ居たりける。中納言月日の重なるまゝに、思のみまさりて、今一たびもとの姿にてあひ見むとおもふ心のつれなさよ。かくてのみあかし暮すになどおぼす程に、年のほどよりもことの外に老いおとろへて見え給ひけり。繼母これを見て、「姫君はたちぬる月とかや、あやしの法師に具してこそおはしけれ。たしかに人のつけ侍りしなり」と聞ゆれば、「いみじき人のことも、この姫君ばかりはおぼえず。いかにしてもたひらかにてだにもあらば、嬉しきことにこそ。誰人のいひけるにか、尋ねあひて、いきたるをり今一たび見て、死出の山路をもやすく越えむ。嬉しくのたまひたり」とのたまひければ、いとなむうげにて、「まことや、たぞ思ひ忘れて」などいへば、むくつけ女、「あのもの侍ふぞかし」などぞいひける。中納言心づきさなしと思ひて、なむあみだ佛あみだ佛とぞ申しける。さて姫君は、「かくて侍るとだに中納言殿に申さばや。心あはせたりとて、神佛にもものろひ給はむにはたがためもいと恐ろしき事なり」「住吉におはせば、さてことぞやみなましか、これは遂に聞え給はむすれば、心やすくおぼしめせ」とのたまへば、姫君「おぼし歎くらむことの

悲しくて世に住むかひなくて」とのたまへば、「誠にことわりながらも、唯申さむまゝにておはしませ」とて、二條京極なる所にわたり給ひけり。明し暮し給ふほどに、姫君過ぎにし年の十月より御けしきありて、またの年の七月に、いと美しくしき若君いできたまへり。中將おほしかしづき給ふことかぎりなし。かうしつゝ、過ぎ行くほどに、中將は願はざるに中納言になり給ひて、やがて右大將になりたまひけり。中納言は大納言になりて、あせちかけたまへり。ともにもうちへ参りあひて、物語のついでに、「老いおとろへてこそ見えさせ給へ」とあれば、大納言まづうち泣きて、「誠にこれにて知らせたまへ。心になはぬもの、命にて侍るかな。かくても生きて候ふ」とて人めつゝ、み給はざりけり。大將この序にやいはましと思ひながら、猶思ひかへしてそらるに涙ぞもれ出でける。さてかへりたまふまゝに、かくなど語り給へば、姫君も侍従も、「親ばかり子は思はぬものぞと、常は仰せられしことの葉かな。かやうに多くの年月を過ぐしながら、かくとも聞え奉らで、おぼしなげかせ給ひつる、いかばかり神佛もにくしとおぼすらむ。あはれ女の身ばかりうらめしきものは」とて世につらげにのたまへば、大將「誠にことわりなり。幼きものも出できたれば、我もいかばかりかは見せ奉らまはしけれども、この幼き人までもおそろしさにこそ。さりながらえらせ侍るべきことも近くなりたり。まばしまたせ給へ」などこしらへ給ひけり。かくしつゝ、過ぎ行くほどに、光るほどの女君いでき給ひけり。おもひのまゝなれば、おぼしかしづき給ふことかぎりなし。かやうに泣きみ笑ひみわかし暮すほどに。わか君七つ、姫君五つまでになり給ひけり。八月はかま

ぎといふことせむついでに、大納言殿にはまらせ奉らむ」と仰せられける程に、大將殿も大納言殿もうちにまゐりあひて、またまづ物語のついでに、「八月十六日に、をさなきものどもに袴着仕らむと思ひ侍るに、ことさら申さむ」とのたまへば、大納言「かしてまつて承りぬ。さりながらもさやうの事にまがまがしき身にて」などきこゆれば、「いかにも思ひはからひて申すなり。かならず」とのたまへば、「ともかくも仰にこそ」とてその日にもなりて、ゆかりあるかんたちめてんしやうびなど参りあへり。大納言も、すこし日暮るゝほどに参り給へり。よろづにあるべかしくて、藏人づかさのものなど参りあひて、いとことごとしきさまなり。時にもなりぬれば、大將、大納言の直衣の袖ひかへて、内へひき入れたまひぬ。母屋の御簾の前に、まどね敷きてするきこえたり。姫君侍從近くよりて、几帳のはころびよりのぞけば、いかばかり悲しかりけむ。若く盛りにおはせしすがたの、あらぬさまにおとろへて、髪は雪をいたゞき、額に四海の波をたゞみ、眼は涙にあらはれて、光りすくなく見え給へり。あなわさましわなわさましとふしまろび給ひけり。さて若君姫君いだして袴の腰ゆはむとて、うち見つゝ、袖を顔におしあて、うつぶし給へり。やゝ久しくありて、おきあがりてのたまふやう、「いはひの所にはまがまがしとは、さればこそ申すかしものを、姫君の御ありさまの、わがうしなひて、思ひなげくむすめのをさなかりしにたがはせ給ふ所なく、そのむかしさへおもひ出で」とて、「忍びかねつるになむ。ゆるさせ給へ」とむせび給へり。これを聞きて姫君、侍從聲もたてぬべき心ちぞま給ひける。涙の色は、鞋の袂にくれなる染の心ちするまで

ぞなりにける。大將これを見たまひて、涙もせきあへず。見とみ聞きと聞く人、心あるも心なきも涙流さぬはなかりけり。さて事どもはてぬれば、人々に引出物さるべきやうにまたまひける。そのうちに大納言殿には、小袿のちめらかなるを奉りたれば、あやしなからたにかけて歸り給ひぬ。大納言かへるまゝに、まゝは、にむかひて、「大將の我をむつまじきものにおぼしてもてなし給ふ。美しくかりつる若君姫君かな。あれをわが孫どもと思はゞ、いかにうれしからむ。田舎人のむすめなれども、さいはひある人かな。さてもその姫君のわがうしなひて思ひなげく、姫君のをさなかりしにさも似給へるよ。あはれ常見奉らばや」とのたまへば、繼母「三の君のもとへおはせし人なれば、そのゆかりとてむつび給ふこそ。あはれその子たちを、三の君の中にまうけ給ひたらば、こゝかしこのためにやすかりなむものを。あたら人の」などいへば、むくつけ女、「關白殿はげすばらの子なればとて、もてなし給はぬ」とぞいひける。大納言殿は、小袿のふりたりつるをあやしと思ひて、とりよせて見たまへば、たいの君に着せはじめし時の袿に似たり。老のひがめやらむとて、うちかへしうちかへしよく見給へば、たいそれにてありける。その時に胸さわぎて、いかにしてかもちたまへば我にしも得させたまへるもあやしとて、唯ざうしき三三人ばかり具して、大將のもとへおはして、寢殿のすのこに居給へり。大將いそぎ出で給ひて、「あしくこれへ」とあれば、大納言申されけるは、「申しいつるにつけて、世にをこがましくなめげに侍れども、よろづになつかしくおはしませば参りつるなり。ゆるさせ給へ」とて、「昨日たまはりたりし小袿の、我がうし

なひて候ひしものを、をさなくて着せそめしうちきにて侍るを、老のひがめにや侍らむ。我が心にかゝるまゝに、人めも知らず走り参りつるなり」と申されければ、このよし姫君聞きたまひて、いまいと待ち居給ひければ、大將のたまはぬさきに、姫君、侍従急ぎ急ぎいで、涙にくれてものをだにいひ給はねば、大納言これを見て、心も消えかへるほどなり。「いかにいかに」とあきれ居給へり。や、久しくありて、心まづまりて、大納言姫君をばそむきて、侍従にむかひてくどき給ふやう、「姫君こそあやしのおやとて、とてもかくてもとおぼしておとづれ給はざらめ。そこをばいかばかりかは思ひ聞えし。今まで命つれなくてめぐり逢ひ侍ればこそ、今日はげざんに入りおもひ消えなましかば、後の世までもおもひにて、よみぢのさはりともなりなましか。わがなれるさま、いは木ならずば見給へかし。あなゆゝしの人のこゝろや。たゞ命のみこそうれしけれ。あかし暮しがたくて積りし月日、いくら程までなりぬとか思ひ給ふ。あはれあはれ人の思ひはなるもの」とてうち泣き給へり。大將、姫君、侍従、おのおのはじめより終までの事ども、かきくどきつゝ語り給ひて、おろかならぬよしのたまひける。時に世のありさま、昔も今もかゝるためしありがたくぞ覺えける。さて日暮れぬれば、大納言かへり給ひて、繼母にのたまふやう、「いでや對の君に尋ね逢ひて侍りつる。誠にあやしの法師に具してひんがし山におはしける」とて、「たゞうきはながらふべくもなし」とて、繼母「あなうれしやな。いかやうにておはしつるぞ。こまかにのたまへ。おぼつかなきに」といへば、「いかなる人のうとましき事をたばかりにけるにか、おもひあまりて住吉まで迷

ひ行きたりけるを、大將殿、ものまゐりの序にもとめ逢ひて、年ごろ具しておはしましけれども、世の中のむくつけさに憚りて、かくともたまはざりけるぞや。あやしの法師に具してありしにや、よくよく聞き給へ」とありければ、「さてさて」とて口うちあきて、目まばたきて、顔赤くなして、いひやるかたもなくてそゝろき居たり。中の君、「たひらかにておはしましけることのうれしさよ」とてよろこび、「あはれあはれとく見奉らばや」とて親ながらもうとましくぞおぼされける。大納言よろづくときたて、身にそふべきものゝくはゝり具して、「心うき世にはまじろひも物うし」とて姫君の母宮の三條堀河なる所へぞわたり給ひける。大將このよしを聞き給ひて、「いかに候ふまじき事なり。たゞもとのやうにておはしますべき」よしのたまへば、大納言殿申されけるは、「あさましく感ひありきけむものを、とりおき給ひて見せ給へば、この世ならずくびめすとも、いなみとも思ふべきにあらず。これはいかのたまふとも、かなふまじき」よし申し給ふ。姫君もまめやかにとゞめ申し給へども、聞き入れ給はでわたり給ひければ、三條へさまさまのども奉り給ひて、人々もまゐりあへり。さても一人おはすべきにあらず。いたはしきとて、大將のをばに對の御かたと申す人にぞすませ給ひける。その普對にすみける人々、さながら大將の許にまゐりて、よろづ過ぎにしかたの事どもかたり出で、泣きみ笑ひみわかしくらしける。その中にも心よせの式部は、またなきものにぞおほしける。關白殿よりはじめて、よろづの人々、田舎の人のむすめと知り給へるほどに、はや按察使の大納言殿の宮腹の御ひすめとて、さもありがたきながらひ

とて、人々もいひあひけるとかや。この事を聞きて、兵衛の佐、中の君どもかれがれにけり。さるまゝに中の君も、親ながらうとましとぞ思ひける。されば人のとはざかるもことわりなりとて、二人ながらねをのみぞ泣き給ひける。姫君このよしを聞き給ひて、むつまじかりし人なればとて、むかへ奉りて、過ぎにし方の世のふしぎなる事どもかたらひ、あかしくらし給ひける。大將もよき事とて、大事のことにぞ思ひ給ひける。年月ゆくほどに、大將殿にはち、關白ゆづり給ひぬ。いよいよ末の世たのもしくぞ侍りける。わか君は元服せさせたまひて、三位中將とぞ申しける。姫宮は十八にて女御にまゐり給ひける。侍従はおとな女にて、よろづに大事の人にご思はれて内侍になりぬ。見聞く人うらやみあへり。大將、姫君、すゑまではんじやうして、めでたくぞおはしける。さてまゝは、見聞く人々にうとまれ、朝夕はねをのみ泣きたまひて、世の中おとろへて、つひにはかなくなりたまふ。むくつけ女は、あさましきありさまにて、まどひありきけるとかや。むかしも今も、人にはらぐるなる人はかゝることなり。これを見聞かむ人々は、かまひて人々よかりぬべきなりとぞ。

住
吉
物
語
終